

## 四旬節第五主日

2013.3.17

(ヨハネ 8・1-11)

今日の福音の箇所は、ヨハネ福音書の全体を通して読むとき、何故このエピソードがこの箇所で語られているのか、前後のつながりがよく理解できないという印象を与えるかもしれません。その分だけ、今日の福音のエピソードは、前後の関係の中でくっきりと浮き立っていて、私たちに強い印象を与えるエピソードになっているとも言えます。しかし、ヨハネ福音書が今日のミサの中で朗読されたこのエピソードを、前後の関係を無視してここで語っているとは考えにくいことでもあります。それで、今日の福音の箇所そのものを味わう前に、聖書が手元にないと分かりにくいかもしれませんが、今日の福音の前後関係を簡単に見ておくことにしたいと思います。そうすることによって、ヨハネ福音書が今日の箇所のエピソードの中にどのような意味を見出しているのかということが、私たちにも伝わってくるのではないかと思うからです。

ユダヤの人々の例大祭の一つである仮庵の祭りの際に、巡礼の人々に交じってエルサレムの都に上られたイエスは、町に向かい合うオリーブ山のどこかで夜を過ごされ、夜が明けると都の中心にある神殿の境内で人々に教えを宣べおられたようです。この頃になると人々の間に、イエスが本当に神から遣わされた者であるか、そうではないかということ巡って大きな混乱が生じ、イエスの言われることを認めようとしない指導者たちはイエスを捕らえて、この混乱を收拾しようと動き始めています。そんな中で、イエスは神から遣わされた者としてのみことばを語り続けておられるのです。

今日朗読された福音の最初のところでは、イエスが「朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、ご自分のところにやって来たので、座って教え始められた」と語られています。皆がイエスの教えに耳を傾けているその場に、律法学者やファリサイ派の人々に引き立てられて、あの女性が連れて来られたのです。人々の見ている前で、この女性を巡って交わされた律法学者やファリサイ派の人々とのやり取りの一部始終、つまり今日の福音が語るエピソードは展開して行ったのです。不思議なことに、今日の福音のエピソードの中には、イエスの周りにいて、イエスの教えに耳を傾けていた民衆のこのことは、最初に語られているだけで、今日の福音の出来事に対して、その場にいたはずの人々がどのような反応を示したかということは語られていません。最後にはイエスとあの女性だけがその場にいるだけで、イエスに彼女のことを訴え出た人々の姿も、初めからその場において、イエスの教えを聞いていた人々の姿もありません。おそらく、ヨハネ福音書は意図的にこのような語り方をしているのだと思

われます。その意図とは、私たち一人ひとりも、あの場に居合わせたはずの民衆の一人のようになって、イエスが律法学者やファリサイ派の人々と交わすやり取り、そしてさらに、あの女性に向けて語りかけられるイエスのおことばを聞くようにと、私たちを招くためであると思います。そのように受け止めて、今日の福音が語る出来事を、私たちの目の前で示されているイエスの救いのみわざとして味わいたいと思います。

今日の福音の箇所直後には、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、いのちの光を持つ」という、私たちが何度も聞いたイエスのおことばが続いています。イエスのこのおことばが今日の福音のエピソードのすぐ後に語られていることによって、今日の福音はこの世の暗闇の中にイエスがもたらしてくださる光とはどのようなことであるのかということを示すエピソードとなっているのです。

神殿の境内で大勢の人々を前に教えを語り聴かせておられたイエスのもとに律法学者やファリサイ派の人々があの女性を引き立てて来て言うのです。「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るためにこう言ったのであると語られています。律法学者やファリサイ派の人々も、イエスが律法の掟どおりにその女性を石殺しの刑にきなさいと言うはずがないことを知っていたのです。律法を否定するような発言をイエスにさせて、イエスを訴え出ようと、彼らはあの女性を引き立てて来てこのような質問をイエスに浴びせたのです。回りを取り囲んでいた人々は固唾を呑んでイエスがどのように応えられるか見守っていたことでしょう。イエスがこの場で、その人を赦してあげなさいと言われれば、イエスは公衆の面前で、あからさまにモーセの律法に背く言動を示したと、律法学者やファリサイ派の人々がイエスを訴え出ようとしていることを周りの人々は知っていたのです。

そのような人々に取り囲まれて、イエスは窮地に追い込まれたかのように、地面に屈みこんでしまわれたと語られています。イエスはあの女性を引き立てて来た人々と議論を戦わせて彼女を弁護することが出来ないかのように。そんな中で、イエスは地面に屈みこんで指で地面に何か書き始められたと語られています。イエスは立ったままで、この女性を訴え出た人々と議論を戦わせて彼女を弁護する代わりに、おそらく、人々の足元に身を投げ出して突っ伏していたにちがいないあの女性の側に、ご自分も身を低くして屈みこんでくださったのです。イエスは弁護者であるよりは、彼女と同じ被告席に身を置いてくださったのです。

それにしても、あの時、イエスは地面に何を書いておられたのでしょうか。

私たちの好奇心を刺激するこのようなことに、今日の福音のエピソードは応えようとしません。謎に満ちたこの空白の部分は、私たちの想像力に任せられているということなのではないでしょうか。そのように受け止めて、あえて、あの時イエスが指で地面に書いていたことを想像してみるのも、あながち意味のないことではないかもしれません。

旧約聖書の出エジプト記の中で、シナイの山に登ったモーセに最初に授けられた十戒の掟を刻んだ石に板は、神の指で刻まれたものであったと語られています。そのことと、今日の福音のエピソードを結びつけることは強引過ぎることでしょうか。イエスがあの時、何も書くものを持たない指で地面に十戒の掟のことばを書いたとしても、それは、跡をのこさなかったことでしょう。イエスは、そのようにして十戒の神のことばを確認されたうえで、あの女性に対して、それを消し去ってくださったのです。そのようにして、彼女を苦しめる罪の意識をも消し去ろうとしてくださったのです。

「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」屈みこみ、そして身を起こされたイエスはこのように言われます。これは律法の掟に背いて神を冒瀆した者として十字架に架けられ、墓の中から復活のいのちに立ち上がられたイエスのおことばです。私たちの心の底の思いまでも知っておられる、神の右の座についておられる、全ての者の審判者としてのイエスのおことばです。神ならざる者の誰が神に代わって人をさばくことができるか、イエスのこのおことばに打たれた人々は、イエスとあの女性をその場に残して去って行かざるを得ません。こうして、彼女は、彼女を取り囲んで彼女の罪を訴えていたこの世の人々の裁きの場から救い出されて、「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」と言われた、彼女の全てを知っていてくださるお方の赦しの中に解き放たれて行ったのです。

イエスの十字架の死とその復活を記念する聖週間を前に、イエスの十字架の死と復活の神秘によって、私たち一人ひとりに与えられている、イエスの今日の福音が告げている、神の大いなる赦しの恵みを深く味わうことが出来るよう祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高